



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成 13 年 7 月 10 日  
通巻 22 号

## バルトン忌 2001 :

### 今年は墓前でバグパイプ演奏とともに水源に想いを馳せよう

今年のバルトン忌では、墓前でバルトンの故郷スコットランドの伝統楽器バグパイプを演奏していただきます。日本・スコットランド協会の稲永氏のご尽力により「スコットランドで修業された名手」斉藤さんから承諾が得られました。

そして、今回は今年4月に山梨県小菅村に「多摩川源流研究所」が設立されたことにちなみ、稲場紀久雄大阪経済大学教授が水源林を守ることの大切さについて講演を行います。バルトンもまたわが国の多くの都市の水道計画のなかで水源林の重要性を主張しました。

なお、当日下関市水道局のご厚意で同局製作のボトル水『あ！関露水』をご参加の方に賞味していただきます。このボトルのラベルには、下関水道の計画原案を作成したバルトンの顔写真も印刷されています。(6面参照)

暑い夏の日ですが、冷たい水でのどをうるおしながら、バルトンと水源に思いを馳せてみませんか。

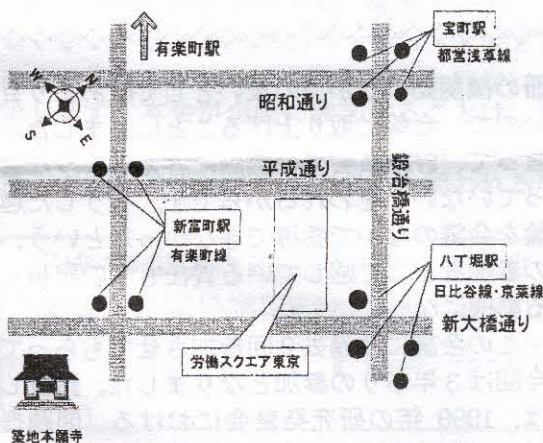
#### 記

日時：8月5日(日)

集合場所と時間 下記講演会場 午後1時00分

講師：稲場紀久雄氏

演題：「山の御爺・中川金治と東京の水源林」



#### 講演会場(集合場所)案内図

労働スクエア東京ワークスサポートセンター  
(中央区勤労福祉会館) TEL: 03-3352-9131  
〒104-0041 中央区新富1-13-14  
交通：日比谷線、京葉線「八丁堀」下車2分/都営浅草線「宝町」下車7分/地下鉄有楽町線「新富町」下車7分/JR「有楽町」「東京駅」下車20分

【講演要旨】日本一広大な東京の水源林はバルトンが策定した首都東京の水道計画で提案されました。この経緯を振り返り、併せて東京の水源林の造営に生涯をかけた隠れた功労者・中川金治に焦点を当て、水源林の経営に払われた努力とその人物のバルトンとの類似性を探ります。

講演の後、地下鉄(日比谷線・千代田線)で移動、墓参を行います。(墓参からの参加の方は、青山霊園案内図の島村花店に午後3時15分にご参集願います。)

※墓参のみ、講演のみの参加も歓迎します。



#### 墓参集合場所

島村花店(待合室があります)  
住所 港区青山2-34-31  
TEL 03-3401-2682  
その他当日緊急のご連絡は  
090-9150-3922(酒井・携帯)まで



## 2001年度日本下水文化研究会総会報告

去る5月19日(土)、本年度の定期総会が水道協会会議室において開催されました。西堀清六代表評議員の挨拶、評議員でもあります岡並木先生の記念講演の後、総会に入りました。

はじめに、前代表の稲場紀久雄氏を議長に選任し、出席者30名、委任状提出117名で本会の成立が確認されました。平成12年度の事業報告、会計報告、財産目録に関する件は全て異議なく承認されました。

つぎに、本年度運営委員の選任に移り、7名の運営委員の留任ならびに新任の運営委員として稲村光郎、後藤雅子、地田修一の3氏が選任されました。今年度は10名の運営委員で執行していくこととなります。監事には藤森正法、柳下重雄両氏が再任されました。

本年度事業計画及び予算については、今年は2年毎の「下水文化研究発表会」開催年であり、今秋、滋賀県大津市で開かれる「第9回世界湖沼会議」に付随する自由会議として開催することが提案されました。これは、今まで蓄積してきた日本の下水文化を広く世界、特に発展途上国に向けて発信したらとのアドバイスを受けたものです。

この事業費を確保するため地球環境基金に助成金の申請を行っておりますが、もしこれが受け入れられない場合は下水文化振興基金としてストックしてきた費用を流用することを含め、本件は承認されました。

自由会議の準備・実行にあたっては、共催者等で実行委員会を立ち上げますが、本会からは酒井代表、木村副代表が参加し、また学識経験者として稲場運営委員にも参加していただきます。

なお、岡先生の記念講演「四万十川が育てた沿川の生活文化」の講演録は機関誌「下水文化研究第14号」に掲載する予定です。



岡並木先生

## 第9回下水道博物館交流会議に参加して(2月1-2日)

運営委員会代表 酒井 彰

昨年度のことになりますが、平成13年2月1・2日に愛知県で第9回下水道博物館交流会議が開催され、私が参加してきました。会員の皆様はご承知のことと思いますが、本会はこの会議の趣旨に賛同し、活動支援として助成金を提供してきています。また、オブザーバーとして1名参加し、特別講演をしています。今年の参加自治体は、ホスト役を務められた愛知県のほか、札幌市、東京都、名古屋市、滋賀県、大阪市である。初めて参加した4年前と比べて3府市の減少、新たな参加はなしという状況です。愛知県がホスト役となったのは、昨年4月に「愛知県下水道科学館」がオープンしたことを記念とするもので、2日に見学が行われました。

下水道をもっと社会に開かれたものとする、そのために市民とどんな接点を持つていくかということは、評議員会などでもよく話題になることです。まさにこの点に情報交流会議の意義があると思います。この会議への参加記は、これまで機関誌「下水文化研究」に掲載してきました。しかし、会議開催から発行までの期間や1

冊の機関誌のなかでの扱いとしてはあまり目立たないので、会報に取り上げることにしました。率直に言って、評議員会での議論に答えるような会議になっていないと思われるからです。そうした趣旨の議論を会議のなかで誘導できなかったという、昨年度の参加者として感じている責任もこの記事を書かせる動機になっています。

この会議には過去2回参加させてもらっており、今回は3年ぶりの参加となりました。講演した内容は、1999年の研究発表会における「問題提起」をベースに、昨年の下水文化研究フォーラムの提言などを交えて行いました。主張したかったことは、リスクの見えにくい社会で、市民がリスクを認知することが市民参加につながる重要なステップであるということ、そのためには情報提供など行政とNPOが協働していかなければならないことでした。

さて、3度目の参加となると各団体からの現状報告には新鮮味が感じられません。相変わらず、



入場者の減少傾向に歯止めがかからない、展示内容の更新に予算がつかないといったことに議論が集中していました。当事者としてはもっとも切実な問題であることは理解できるにしても、各自治体が持っている科学館や資料館そのものの PR 方法の議論に終始している感を受けました。本来の目的は、下水道や水環境にかかわる情報を市民にどう PR していくかということであるはずですが、下水道博物館に人が来なければ情報の提供ができないじゃないか、という意見も聞こえてきそうですが、どういう情報をどのように提供するかという議論がまずあって、そのための手段として下水道博物館を位置づけることが先になければならないことだと思います。今のままでは、「展示が飽きられた」→「入場者減」→「予算削減」→「魅力的な展示ができない」→「忘れられてしまう」といった悪循環に陥る危険性があるといっても過言ではありません。何らかの施設を持っていて、メンバーとなっている自治体は増えているようですが、この会議へ実際に出席する自治体が減っていることは、この会議にも魅力が足りないということであり、そうした会議から新たな視点は出てこないように思われます。

本会の貴重な会費から助成金を払っている以上、情報交流会議の本来の趣旨を今一度確認してほしいという気がします。これは、受け入れられるかはわかりませんが、本会に今その力量があるか問わなければいけないのですが、助成金だけでなく日本下水文化研究会はこの情報交流会議の企画に参加していくべきではないかと考えています。事務局の持ち回り、異動による担当者の頻繁な交替といったこの会議の運営上の問題の解決にもつながると思います。会費が有効に使われているかどうかは会員の関心事ですし、今のままでは会費が活かされているとはっきり伝えられないのではと危惧します。本会が企画に参加することは、まさに行政と NPO の協働と言えると思います。

じゃ、どんなアイデアがあるのかと問われるでしょ

うが、ひとつは、下水道だけの枠にいつまでもとらわれていてはならないのではないかと思います。市民との交流を意図した施設は、ほかの分野でたくさんあります。見学場所だって、新しくできたお互いの施設を見ていくだけでは、小さなアイデアにうなづくことはあっても、発想を転換したり、多くを学んだりすることはできません。

もうひとつは、市民がどんな情報を求めているかということを押さえることです。これは、今の施設への来館者を対象としてもいいでしょうし、アンケート調査を行ってもいいと思います。下水道をはじめ都市施設は本来市民のものであるはずですが、高度な技術を誇ってばかりいては、市民の関心は薄れ、情報をすることも困難になってしまいます。手前味噌になりますが、私が 4 年前に「下水文化研究」で述べていたことを再録させていただきます。「下水道が成熟期を迎え、その役割の新たな展開を市民に理解してもらうためには、今何が問題かを示していくことから始めなければならない。そうした情報発信の拠点として下水道博物館を位置づけたい。」(一部手直し)

参加記というより、会議のあり方の批判ばかりになってしまいましたが、2 日に訪れた愛知県下水道科学館は、見える下水道を意識して展示の工夫もされていました。そして何より、地域の人々に展示コーナーを開放し、環境に関するポスターやパネルが展示されていたり、小学生向けの環境学習の場としても活用されていたりしている点で、市民との交流の場であるという認識を持たれていることには敬意を表しなければなりません。また、科学館の展示企画や運営に携わってこられた山本純さんが、会議へ提出した議題には(議論する時間は十分ありませんでしたが)、自然環境、生態系に関する各機関との連携、住民との情報交流への取り組みといったことが取上げられていたことを参加記として述べておきたいと思います。

平成 12 年度第 2 回定例研究会講演 (平成 12 年 12 月 15 日)

埼玉県環境科学国際センター研究所長 河村清史氏

### 『し尿処理技術の動向』を聴いて

し尿処理研究会 会長 地田 修一

平成 12 年 12 月 15 日午後 6 時 30 分より東京・水道橋の水道会館会議室において、河村清史氏をお招きして「し尿処理技術の動向」について講演していただきました。さらに、講演後の質疑応答ならびにフリーな意見交換の場においても、忌憚のない見解を拝聴することができました。

河村講師は、国立公衆衛生院で長らくし尿処理技術の研究・開発に携わってこられ、現在は、埼玉県環境科学国際センターの所長として活躍されています。分

科会のし尿研究会の会員でもありますことから、今回の定例研究会は、分科会活動(第 9 回目)の拡大版であるとの位置付けにしました。

汲み取ったし尿を専用のし尿処理施設で集中的に処理する手法は、世界的に見ても我が国に独特なものであり、その技術もたいへん高いレベルにあります。講演では、次の四つの段階に分けて、時代を反映した社会的要請とそれらに対応するための技術開発について技術史的に概観していただきました。



すなわち、

- ① 衛生対策としてのし尿処理技術（嫌気性消化技術など）
  - ② 処理水質の高度化に対応する処理技術（脱窒、脱りん、脱色技術など）
  - ③ 浄化槽汚泥に対応する処理技術（膜分離技術）
  - ④ 処理対象の拡大と資源循環に対応する処理技術（汚泥のコンポスト化、メタンガス回収など）
- の四段階です。

そして、今後、収集されるし尿や浄化槽汚泥の量が減少してくるなかで、「多様な有機性廃棄物を受け入れていくとともに、炭素、窒素、りん及びエネルギー等を積極的に回収するために、現在までに蓄積されてきた高度なし尿処理技術を液状廃棄物の資源化技術へと転換していく時期にきています。」と、将来への展望を述べられました。

最後に参加者と活発なディスカッションが行われました。（運営委員 地田修一）

## 弁天様と水を訪ねて(六) 箱根畑宿・弁天山清流公園

運営委員 栗田 彰

「箱根ターンバイク」に沿った所に弁天山（標高九八七・八メートル）があるのを『箱根観光案内図』で知りましたが、山登りに自信がありませんので、箱根細工で有名な畑宿にある「弁天山清流公園」を訪ねてみました。

バス停から山裾の道を下っていきますと、やがて開けた谷地に出ます。「弁天山清流公園」の入口に当たるところに鉄製の赤い鳥居が建っていましたが、何を祀ったものなのか書いたものが何もないのでわかりません。

山裾の開けた谷地にある「弁天山清流公園」はよく整備されていて、芝が植えられた公園の中に清流が続いています。下水処理水を流して「清流復活」というのとは違って本物の清流です。須雲川の上流になるのでしょうか、鱒の釣り場になっています。

公園内の清流の所々には何とか淵といった名札が建てられています。そのうちの一つに「弁天ヶ淵」というのがありました。立て札には深く危険だから淵の中に入らないようにと注意書きがされています。それほど大きな淵ではありませんが水は透き通っていて淵の底も見えます。

山の頂がいくつも見えますので、釣場の方に聞いてみました。

「弁天山というのはどの山でしょう？」

「知らないなあ。いま聞いてあげる」

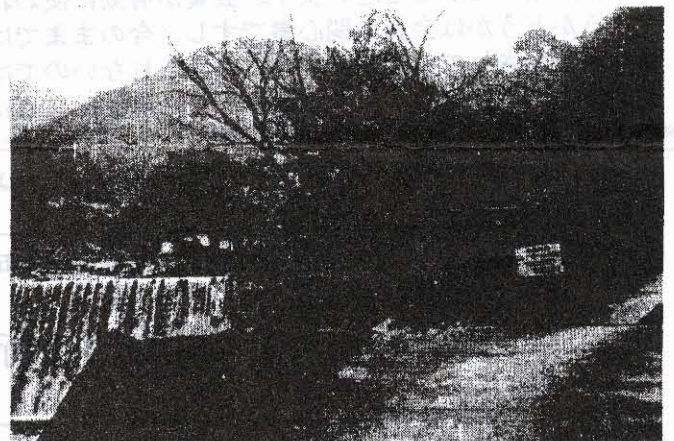
と、どこかに電話をしてくださいました。が、「弁天山なんて聞いたことがないって」という返事

でした。

「ここは弁天山清流公園といいますが、弁天様を祀ったお堂がありますか？」

「公園へ入ってくる所に鳥居があったら？。ときどき弁天様のお祭りを行っているようだから、あれがそうじゃないのかなあ」

引き返してよく見ますと大きな岩のえぐれた所に太い注連縄が吊るされています。洞のようにえぐれた岩のところに小さな石が積み重ねられているのが御神体なのかも知れません。その前には石をくり抜いた水盤と鉄製の賽銭箱が据えられています。水盤に水は入っていません。すぐそばまでゴムホースがのびて来ていますので、お祭りのときには水が張られるのかも知れません。



## 会員アンケート結果の概要報告

日本下水文化研究会の運営に対するアンケート調査を会員皆さんの協力を得て、実施しました。総会員、284名中、回答を頂いたのが91名で、約1/3の人達から回答を頂きました。本当に有り難うございました。1/3もの会員から回答を頂いたことは、会員

皆さんの本会への関心の高さを表しているものと思われまます。

その内容は、概ね現在の本会の現状を容認するものでありましたが、中には厳しいご意見もあり、運営委員一同非常に参考になりました。



以下、項目ごとに、その概要を述べてみたいと思います。

### 1、本会の活動全般について

「継続しているからよい」と答えた人が58.2%、「魅力がある」と答えた人が23.1%あり、概ね現在の活動を容認していると思われます。

### 2、イベントについて

「参加した」と答えた人が47.3%、「参加しなかった」と答えた人が52.8%あり、半分以上の人が参加しないか、または参加できない状況にあります。なお、参加しない理由は次の通りです。

「忙しい」12.1%、「日時があわない」17.6%、「地域理由」20.9%となっており、イベントが東京に集中しており、地理的、時間的に参加できない会員が多いものと思われます。

### 3、機関誌について

評価を5段階で回答してもらいました。全体的に3か4の評価が圧倒的に多く、81.4%にも達しています。機関誌は、一応合格点をいただいていると思われます。

### 4、会費について

会費は現在、年会費4000円を納めていただいています。その評価は7.9%の人が「本会は会費にあった活動をしている」と考えています。

会費の値上げについては45.1%の人が反対であり、会費値上げに賛成の人は27.5%でありました。

### 5、名簿の必要性

名簿の作成については47.3%の人が賛成し、「どちらでも良い」と答えた人と合わせると83.6%になり、反対は8.8%しかありませんでした。

### 6、活動に参加することについて

「興味あることなら参加したい」と答えた人が41.8%で一番多く、その他「是非参加したい」と「頼まれれば」と回答して人を合わせると72.6%になり、多くの人が、機会があれば活動に参加したいと考えていると思われます。

### 7、会員の充実について

「会員は多い方がよい」と答えた人が44%、「会員の多様化」が22%、「増やさなくてもPR」が25%であり、半数近くの人が会員の増加を望んでいます。

会員の増加策としては、「関連団体とのネットワーク」、「地方でのイベントの開催」等の意見が多くありました。

### 8、研究会のホームページについて

本会のホームページについては「見たことがない」と答えた人が51.7%「知らなかった」と答えた人が25.3%あり、合計77%の人が見ていないこととなります。会員への情報伝達手段としてはまだ有効に活用されて

いないようです。

### 9、「ふつりゅう」の評価について

「ふくりゅう」の評価については5段階評価で回答してもらいました。全体的には、3から4の評価が多く合計で82.5%に達しています。まずまずの評価であると思われます。

### 10、財源の確保について

財源の確保については、約半数の人が会員、賛助会員の増加を計り確保すべき、としており、会員の確保が重要であります。その他研究、活動助成金の取得をあげています。

### 11、事業展開について

今後の事業展開については約半数の人が「関連団体とのネットワーク」、「情報の収集整理」を望んでおり、その他「環境教育教材」、「外国への伝達」、「実践的活動」等があげられています。

以上がアンケート結果の概要です。最後に回答を頂いた方々の背景をまとめてみると次のようになります。

#### 1、地域別

北海道3.3%、東北3.3%、関東42.9%、中部7.7%、関西14.3%、中国5.5%、四国1.1%、九州2.2%

#### 2、入会年数

当初から48.4%、5年以上31.9%、3年以上7.7%、3年未満4.4%

#### 3、年齢

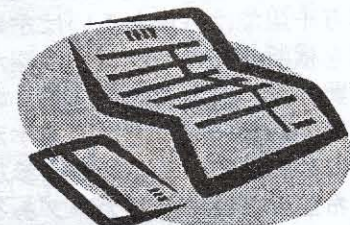
40才未満  
3.3%、40～50才  
14.3%、  
50～60才  
43.1%、60才以上  
40.7%

#### 4、性別

男 86.7%、女 3.3%

会員は関東、関西地区に集中し、高齢化が進んでいます。また、女性の会員が少なく、会の性格上女性の会員をもっともっと増やすことが重要であると思います。また、若い会員の入会が望まれます。女性会員、若くフレッシュな会員を増やすため、何かよい方法をお気付きの方はご教示願います。

なお、この外にも「良かったイベント」「イベントの改造点」「印象に残ったイベント」「機関誌出版物の改善点」「新たなサービス」「財源確保」「今後の事業展開」「自由意見」などについて、文章で、様々な興味あるご意見を頂いております。今回は紙面の都合で発表できませんが、次の機会に報告したいと考えております。





## 日本下水文化研究会主催湖沼会議・自由会議の関連ニュース

湖沼会議・自由会議の準備を進めていますが、その後の経緯などお知らせいたします。

- ① 英文の案内書ができました：会員の皆様にお配りした第1回案内書の英訳いたしました。ホームページでごらんいただけます。海外の方、在日中の方にご紹介いただくと幸いです。(第9回世界湖沼会議の英文ホームページのfree meeting から進んでいただいてもアクセスできます。)
- ② マレーシアから基調講演者としてお招きする予定であった Lum Weng Kee 氏が日程調整が難しいため来日ができなくなりました。現在、Deputy DG (副局長) に当たる方と交渉中です。
- ③ 論文応募ありがとうございました。これからプログラムの調整など進めていきます。
- ④ 世界湖沼会議では多くの分科会・セッションが設定されていますが、本会運営委員の投稿した次の2編の発表文が選考されました。

稲場紀久雄：大震災と琵琶湖の水質危機 (セッション5-C:「流域管理の方法と実践」、ポスター発表 11月14日 12:00～14:00)

酒井彰：家庭内有害物質と環境汚染リスク (セッション3-H:「住民と水質問題」、ポスター発表 11月15日 12:30～14:00、オーラル発表 15日 16:00～17:30)

- ⑤ お願い：本企画は我が国の「下水文化」を広く海外へ伝えるはじめての機会になります。そのため展示や研究発表の内容を海外の方にも理解していただく必要があります。そこで多くの方から論文・発表や展示説明文の翻訳等でのご支援・ご協力が必要になります。この他のことでも結構ですから、お手伝いいただける方は申し出ていただきたいと思ひます。

**会費納入のお願い**：今回は本会報、平成13年度会費請求とともに送らせていただきました。本会の事業は皆様からの会費で行うことができます。早期の納入よろしくお願ひいたします。

**会員サービス**：総会報告の中でご紹介した岡並木先生の講演内容が掲載される機関誌は第14号となり、発行は、1年以上先になると思ひれます。四万十川では右岸あるいは左岸の上下流よりも川を横断してのつながりが深かったというような興味深い内容でした。先日のアンケートで指摘いただいたことなのですが、東京から遠方のため物理的にイベントに参加しにくい方で、ご希望の方には録音テープあるいは原稿などお貸ししたいと思います。機敏な対応はなかなかできないかもしれませんが、お応えしてきたいと思ひますので申しつけください。

**編集後記**：7月に入ったばかりと言うのに真夏日が続いています。皆様体調をくずされたりしていないでしょうか。▶今年もバルトン忌の季節がやってきました。山林の維持が困難になっているいま、もう一度、貴重な水と国土を保全することについて考えてみる機会になればと思ひます。そして、関心をもたれる方が少しでも増えて、来年からの多摩源流まつりがよりいっそう盛大な催しになればと思ひます。多くの参加をお待ちしています。(酒井彰)



←下関市のボトルウォーター「あま！関露水」のラベルに登場した W. K. バルトンの肖像

ふくりゅう 通巻 22号  
主な目次:

2001 バルトン忌のお知らせ	1
2001 年度総会報告 下水道博物館情報交流 会議参加記	2
平成12年度第2回定例研究会報告	3
弁天様と水をたずねて (六) 会員アンケート結果概要 報告	4

特定非営利活動法人  
日本下水文化研究会  
〒162-0067 新宿区富久町6-5  
NJS 富久ビル別館3F

TEL & FAX 03-5363-1129  
jade@jca.apc.org  
aan63630@syd.odn.ne.jp

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

ホームページもご欄ください。  
<http://www.jca.apc.org/jade/index.thm>